想い出すままに

山口建治

1　赴任したばかりのころ

一九七六年四月に神奈川大学の中国語専任講師として赴任した。それまでは東北大学文学部中国文学研究室の助手をしていた。中国との国交回復後の日中交流が本格化しだすころでもあり、大学の中国語教員が求められていた時期であった。今では何年も非常勤講師を続けた後にようやく就職できるというのが普通だが、比較的容易に専任の職に着けた。横浜には何の縁もなく、最初は二十号館の裏の職員用住宅（今は野球部の合宿所になっているところ）にしばらくいて、逗子にアパートを探して住んだ。なぜ逗子かというと、駅を降りると空が大きく広がっているのが気に入って、ここにしようと決めた。そのころは個人研究室というのも無く、研究室はわたしを公募で採用してくれた沼上先生と相部屋であったし、授業が終わると白楽駅ちかくの居酒屋に直行したものだった。

学内は大学紛争の余燼がまだ燻っている有様で、教授会でも刺々しい議論になることがしばしばだった。学生の実力行使（ストライキと称する学園封鎖）により、期末試験が実施できずに、レポート提出に切り替わったりした。学生が騒ぎを起こしそうになるたび、若手の教員はちかくの別館と称する宿泊所に泊まり待機させられた。

神奈川大学創立者の米田氏が辞めてまだ間の無いころであったからであろう、学内はアナーキーな雰囲気に満ちていた。「学生自治会」の団体交渉に応じた学生部長が、学費値上げの白紙撤回を迫られ授業料が上げられなくなり、一時、国立大学並の授業料になって話題になった。そうこうするうち沼上先生が退職され、その後任に鈴木陽一氏が赴任された。ようやく海外研修に出かけられる条件ができ、一九八四年、神奈川大学との交流事業で知り合った北京鋼鉄学院の先生の紹介により、北京師範大学に進修生として留学することになった。もう三十八歳になっていた。

2　北京師範大での研修

始めて長期に中国に滞在できる機会を与えられ、はやる気持ちで北京に旅立った。大学は中国語学科を卒業したといっても、十数年間ほとんど中国語を話す機会が無かったので、コトバの聞き取りに苦労した。留学生食堂で料理を皿に盛ってくれるおばさんのしゃべるコトバがとても速く感じられ面食らった。北京の生活に少し慣れてくると、毎週のように自転車に乗って京劇を見にいった。劇場のある市中心部まで自転車で三十分くらいで行けたので、前もって切符を手に入れるために劇場にいき、その数日後また見に行くという、面倒なことをしてい

た。自転車で北京の大通りや路地を走り回るのが楽しかった。そのころは車が少なく、人々はみな自転車に乗って暮らしていた。

北京師範大で二人の先生の教えを受けた。前半は、『紅樓夢』が専門の張俊先生、後半は民俗学（民間文学）の張紫晨先生である。一年の研修期間中に二人の先生のご指導を仰ぐというのは、私のたっての希望で実現したもので、異例なことであった。張俊先生からは、馮夢竜の文章の講読、張紫晨先生には馮夢竜編纂の「山歌」（明代の民謡）の解説をお願いした。また、それと並行して、当時まだ助教だった、蘇州出身の厳明先生（現在、上海師範大教授）に蘇州語の手ほどきをお願いした。そのころの私は、馮夢竜研究が自分の仕事だと考えていたのである。中国語学科ができると、学科の授業と小説研究を両立させるのは難しいと判断してこの方面の研究は断念することにした。

当時の中国社会は、まだ社会主義時代の色彩が色濃く残っており、着ている服は男女とも黒か紺あるいは灰色であり、華美な服装をして目立つと冷やかされそうな雰囲気があった。まだまだ貧しくて、給料はいくらもらっているのかが話題になって本当の金額をいったりすると、中国人にとっては想像を絶する額になるので、少な目にいってごまかすようにしていた。

留学から帰国した翌年の一九八五年の春、馮夢竜の学会が福建省の片田舎である寿寧県で開催された時、日本から出かけて参加したことがあった。福建省と浙江省との内陸部境界近くにある寿寧までは、福州からバスを乗り継いでいったが、こんな山奥にまで日本軍が来たらしく、学会の期間中に戦争犠牲者の慰霊式があるというので、それに参加させてもらった。戦争の傷跡が人々の心になお残っていることを実感した。

3　中国語学科創設

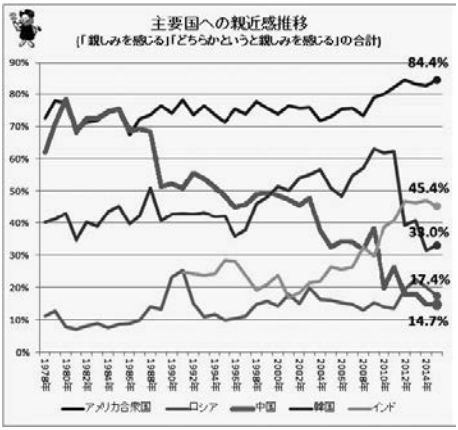
一九八五年、菅野敏雄氏が理事長に就任すると、学園紛争の後遺症でなかなか立ち直れなかった神奈川大学の教学改革が一気にすすんだ。平塚キャンパスに二つの学部新設と外国語学部に中国語学科増設が断行された。それまでは学部内でいろんな新学部構想が打ち出されては消えていく、足踏み状態がながく続いていた。八十年代のはじめごろ、英語英文学科の福田先生が学部長のころだと思うが、国際文化学部の構想が検討されていたので、中国語学科増設という案は教員のあいだから出てきたものではなく、菅野理事長の発意だったようである。当時は、国交回復して十年あまりたち、戦争とその後の文化大革命の混乱ですっかり疲弊していた中国の立て直しに協力したいと考えた人々が社会の上層部にはおおくいた。とくに先の戦争に動員された人たちを中心に、中国への贖罪感もあって、中国の経済復興に協力し、日中関係が正常に発展するようにと願う気持ちが、いわば社会的な雰囲気として、当時の日本には広範にあったように思う。

中国への風当たりが強い昨今の日本とはまるで逆の風潮である。最近、こんなグラフをネット上で見つけたので、ここに載せておく（インターネットサイト『ガベージニュース』が内閣府二〇一六年三月一四日の外交に関する世論調査に基づいて作成したという）。このグラフの一九七八年から中国語学科創設の一九八八年まで、中国への親近感は、なんと七〇％を超え米国へのそれとほぼ同じであったのが、天安門事件が起きた一九八九年から一気に下降していく。それに対しアメリカへの親近感は八〇％を前後するだけであまり急激な変化はない。わ

たしにとってはそのどちらの傾向も異常としか思えないのであるが……。

当時の中国語の教員は、私と鈴木陽一氏の二人だけだったが、中国語学科を増設すると言われて、私たちは少々慌てた。わたしは四十歳になるかどうかの歳だし、鈴木氏は赴任してまだ間もない三十歳なかばであった。英語・スペイン語の教員を除く外国語の教員グループは、ＤＦＣＲと一括され学科に準ずる扱いをされていた。そのグループから抜けて中国語学科だけを作るというのだから、一部の先生方からは不興を買ったようだった。

外国語学部という名称の下の中国語学科というと、中国語だけを教えるところと思われがちだが、私と鈴木氏との間では、一般的な中国語学科と中国文学科を折衷したような教育内容を目ざすことでほぼ考えが一致していた。カリキュラムもそのような内容であった。いまから考えるとやや文化面に偏ったカリキュラムだったかも知れない。今日のように、中国文化への興味関心どころか、中国そのものへの関心が薄らぎ、中国や韓国への嫌悪感をかき立てるような本が書店に山積みされる事態になっていることを考えると、もっと広範囲に中国やアジアの現状をとらえ教育するようなことが必要になってきているのかもしれない。



2016 年（右端）の％と国名：84.4% アメリカ　45.4% インド　33.0% 韓国　17.4% ロシア　14.7% 中国

4　わたしの先生

中国への関心を持ったのは、高校生の時漢文の授業を担当してくれた南一郎先生のおかげである。それはまた、ケネディーが暗殺され、南ベトナムへのアメリカの侵攻が激しくなっていたころで、何となく懐いていた先進国アメリカのイメージが裏切られた反動からであったかもしれない。ともかく南先生の漢文の授業は、わたしにとって、受験勉強の息抜きの時間のように感じられた。当時、先生はもう定年退職して非常勤講師として教壇に立っておられたのだが、授業中時々、ご自分がテープに吹き込んだ詩吟を聴かせてくれた。わたしが中国のことを学ぶために進学したいと告げると、京都大学の吉川幸次郎先生を紹介してあげると励ましてくれた。

一九六五年、大阪外国語大学に入学して、伊地智善継先生に中国語を教わった。教育熱心な先生で、後年亡くなられた時、あるときから中国語のベストティーチャーになると心に決めていたという話をうかがった。中国語学会の会長や大阪外国語大学学長に任ぜられ活躍された。三年生になって音韻学の辻本春彦先生のゼミに入った。ゼミといっても学生は一人だけで、四年生の人が時々授業に加わるというのどかなものだった。学生のおおくは伊地智先生とか現代文学の相浦先生のゼミに入ったが、わたしはどうも大勢に靡くのが嫌いで、あまり人気のない辻本先生について中国語音韻論を学ぶことにした。辻本先生は論文などあまり書かれないが、その道ではよく知られた先生であり、後におおくの音韻学者を輩出した。

一九六九年四月、東北大学大学院文学研究科中文専攻に入学した。学園紛争のため東大が入学試験を実施でき

なかった年であり、入学したものの、連日、教室が封鎖され授業できず、研究室単位で討論会をするような日々が続いた。中文の研究室は、文学部の建物から離れた別棟にあったため封鎖されず、自分たちで読書会や囲碁などをして日を過ごすことがおおかった。わたしの指導教授は内田道夫先生で小説史が専門だった。温厚で夫子然とした先生を慕う学生がおおく、全国的には紛争のさなかであったが、中文の研究室は家庭的な雰囲気に満ちあふれていた。そのころ研究室の教員学生卒業生が挙げて参加して作った内田道夫編『中国小説の世界』は、わたしが仙台に来た翌年の一九七〇年十二月の出版であり、そのころ研究室が一丸になって本を出版するなどというようなことは、全国的にみてもきわめて珍しいことのようだった。しかし残念ながら、内田先生はわたしがドクター一年の時、連合赤軍浅間山荘事件の年、大学紛争の余波で教授陣が手薄になっていた都立大学に懇願され転出された。

その後指導教授になったのは助教授の志村良治先生で、文学から中国語学まで幅広く研究されていた。志村先生も非常にやさしい先生であったが、中文の研究室を一人で担っていかねばならない重圧からであろうか、還暦を迎える前に癌で亡くなられた。

5　わたしの中国文化研究

こういう一文には、ふつう論文目録などを掲載するのが通例なのだが、現段階でそんな目録を作る心の余裕がない。わたし自身が多少とも意味ある仕事をしたと思えることをいくつか摘記することで、その責めを塞ぐこと

にしたい。

（1）『仙台における魯迅の記録』（一九七八年、平凡社）

仙台で東北大中文の助手をしていた時に、教養部の教員だった阿部兼也先生の指導のもと、魯迅（本名、周樹人）の仙台時代の記録を発掘調査するのに協力従事した。その頃には、まだ仙台医専時代の魯迅の同級生が数名存命中であったので、その方々から話を聞いたり、東北大（仙台医専はのち東北大医学部に吸収合併された）の事務文書を保管している倉庫に入り込んで、医専関係の書類をかり出して徹底的に調べた。阿部先生は、毛筆で書かれた和綴じの事務文書を一枚一枚はがし、写真にとり、それをまた元どおり綴じ直すというようなことを、学生を動員して行った。阿部先生の調査の徹底ぶりには舌を巻いたものだった。わたしなど毛筆でくねくねと書かれた文書を見ただけで諦めて投げ出したくなるような書類がおおかった。この調査活動を通じて、仙台時代の周樹人の事跡について、それまで知られていなかった事実や資料が多数発見・発掘され、社会的にもおおきな反響を呼んだ。わたしが執筆担当したのは第四章「藤野先生」である。

（2）「馮夢竜と開読の変」（一九八八年、『東方学』第七十五輯）

明治大学の非常勤講師として、中国語を教えに行っていた時のこと、控え室のテーブルの向かいに坐って居られた山根幸夫先生（明代史の大家）が親しく話しかけてくださり、東方学会の会員になるよう勧めてくれ、ご親切にも推薦人になっていただけるという。それではと入会の手続きをしたのだが、年に何千円もの会費を払うのだから論文を寄稿しようと一念発起して、投稿したのがこの論文である。内容は、内閣文庫に蔵されていた馮夢竜の『智嚢補』は、それまでまだ誰にも取りあげられていない版本であるらしいことが分かっていたので、その

『知嚢補』序の内容および本文に挿入された馮夢竜の評語を、その当時の蘇州で起こった知識人が主体となった民衆暴動「開読の変」との関連で読み取り分析したものであった。自ら掘り出した新資料を使った点が評価されたのか、一九八八年度の東方学会賞をいただいた。後にも先にも賞などというものをもらったのはこれが初めてである。

（3）『中国通俗文芸への視座』（一九九八年、東方書店）

中国語学科創設十周年事業の一環としてこの書を編集した。言語編、歴史編、文学編の三冊を同時に編集出版できたのは、学科教員の協同の賜物だが、学科創設の勢いがまだ残っていたからであろう。わたしは文学編であるこの書に「民話と小説―白蛇伝の場合―」という一文を執筆掲載した。現在に伝わる民話と明末の白話小説「白娘子永鎮雷峰塔」とから、白蛇伝説話の形成過程を論じたものである。民話というものは、時代的には新しものだが、説話の古い内容がそこに残される場合があるということを、この一文を草する過程で実感した。語り物の弾詞「雷峰塔」や芝居の伝奇「雷峰塔」などとも関連づけ、民間での白蛇伝伝承を総合的に研究するのはなお興味ある課題だと思っている。

民話研究というのは本来は現地調査に基づく資料採集が基本になければならないであろうが、外国人にとって中国の民話を直接採集するのは難しい。どうしても中国で採集・記録された出版物に基づく研究になり、隔靴掻痒の感じがぬぐえず、本格的にとり組めなかった。表向きは専門は中国民話研究と称しながら、あまり十分な研究ができなかったのは残念というしかない。

（4）『オニ考』（二〇一六年、辺境社）

二〇〇一年に「オニ（於邇）の由来と『儺』」という論文を岩波書店の『文学』に発表した。オニの語源については、『和名抄』の「隠」の字音 wen からでたものという通説があるが、その箇所はおそらく源順の原本には無かったものと考え、あらためてその語源を追究した結果、南北朝期の中国で発生した「遣瘟」儀礼の「瘟」の字音が和語化してオニになったのであろうと主張した。この論文を書いたのをきっかけに、日本の伝承文化のなかに中国民間文化が思いのほかにおおく潜んでいるのではないかと思うようになり、もっぱらそういう角度から中国の民間文化を研究するようになった。

一九八〇年代は、文革中のブランクを埋めるように学術界も活況を呈した。民俗学も公認され、さまざまな民俗文化の調査活動が展開されるようになった。それまでは迷信といわれて閑却されていた、亡魂である「鬼」の研究も盛んになってきた。とくに疫鬼をはらう「儺儀」という古代の宗教儀礼が中国の辺鄙なところでは今なお残っていることがわかり、内外の研究者が「儺文化」研究のため調査に出かけた。その先駆者の一人が、経営学部の廣田律子教授であり、彼女に案内され私も何回か調査に参加させていただき、「儺儀」というものがどういうものかについて、初歩的な認識を得ることができた。その経験があったからこそ、「儺儀」が日本にはどのように伝わったのかという問題意識を持つことができた。その意味で廣田教授から受けた学恩は計り知れないほど大きい。あらためて感謝の意をここに表しておきたい。「儺」は日本では追儺と称され、おもに宮廷儀礼としての大儺の研究はあるが、中国で「郷人儺」といわれる民間の「儺儀」の研究はあまり見かけない。日本各地の所謂「鬼追い」の習俗がそれに相当するのだろうが、それとの比較研究が立ち後れている。

退職間際になって、著作が一冊もないのはやはり寂しいことだと思い、これまで書いた論文をいくつか選び一

冊にまとめることにした。上記の「オニ（於邇）の由来と『儺』」を中心に、中国民間の漢語がそのまま日本の民間基層文化に入って和語化したという仮説をテコにして、日本の伝承文化の謎の解明に立ち向かい、ささやかながら一定の成果を得ることができたと、自分では思っている。

6　最後に

つい最近まで知らなかったが、出身地の香川県は古代の渡来系氏族秦氏がおおくいたところだそうである。そう言われると思い当たる節が少なくない。秦氏と徐福伝承は密接につながっているようなので、そのあたりを中心に、日本の伝承文化のなかに潜む中国伝来の文化を探ることを続けていきたい。前に引用したグラフに見える、日本人の一五％近くが中国には親しみを感じないというのは、これまでの長い日中間の交流の歴史に照らして考えるならやはり異様であり、日本の将来にとってけっして好ましいことではないと思う。日中両国の人々の間での意思疎通の改善に少しでも寄与できるような仕事を今後も続けていきたい。

四十年あまりもお世話になった神奈川大学と中国語学科のすべての人々に感謝を申し上げたい。ありがとうございました。

（二〇一六年十二月）